

A-Lab
あまらぶ アートラボ

尼崎市

お問合せ先

尼崎市 文化担当部 文化振興担当
TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)
FAX : 06-6489-6702
E-mail : amalove.a.lab@gmail.com

archive
vol.25

A-Lab archive

A-Lab Exhibition Vol.23

新鋭アーティスト発信プロジェクト
A-Lab Artist Gate 2020

坂本大地
大東真也
玉木和葉
土取郁香
西川涼香
山口芽生
吉岡優輝



新鋭アーティスト発信プロジェクト「A-Lab Artist Gate」

本プロジェクトは今後の活躍が期待される若手アーティストによるグループ展。大学を卒業か大学院を修了され新たなステップに羽ばたこうとしている若手アーティストをご紹介しますプロジェクトです。

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.25

新鋭アーティスト発信プロジェクト

A-Lab Artist Gate 2020

目次

■ 出展作家	1
坂本大地	1
大東真也	3
玉木和葉	5
土取郁香	7
西川涼香・山口芽生	9
吉岡優輝	11
■ アーティスト・トーク	13
■ フライヤー・配布資料	32

■ 出展作品



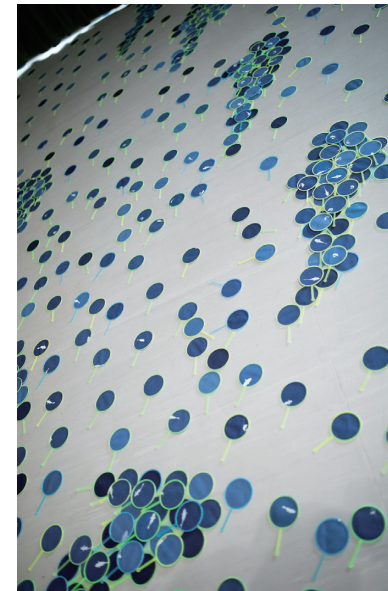
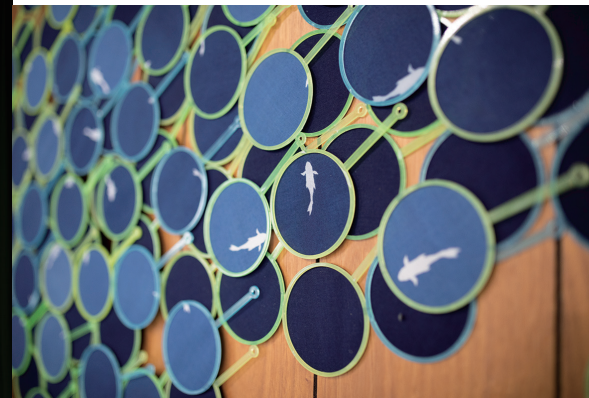
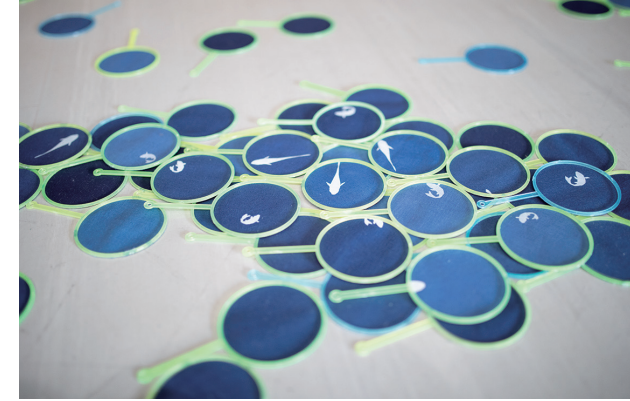
坂本 大地 Sakamoto Daichi

1995年 生まれ。大阪府出身。大阪芸術大学大学院製作専攻工芸領域修了。

【近年の主な展覧会】

2019 「NIF・YOUNG TEXTILE 2019」、東京ビックサイト、東京

2018 大阪芸術大学工芸学科新進気鋭作家展「工芸のちから」、あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階催会場、大阪



- statement -

「fish story」は法螺話という意味がある。本当は小さな話を大きく誇張する事を法螺話と言うが、それはどうにか自分の話を大きく見せることで自分を他とは違うように見せる、自分たちを大きく見せて周りから身を守ろうとする小魚の群れによく似たものがある。大きな魚に見せようと小さな魚が集まっているように、ポイを法螺話の魚に見立てて大量に貼る事で近くで見なければ分からないポイの中に居る小さな魚の群れとポイ全体で表現された魚で、実際の魚の大きさと法螺話によって作り出された大きな魚を表現している。

fish story -A-Lab-



■ 出展作品



大東 真也 Daito Masaya

1995年 生まれ。滋賀県出身。京都精華大学大学院芸術研究科立体専攻修了。

【近年の主な展覧会】

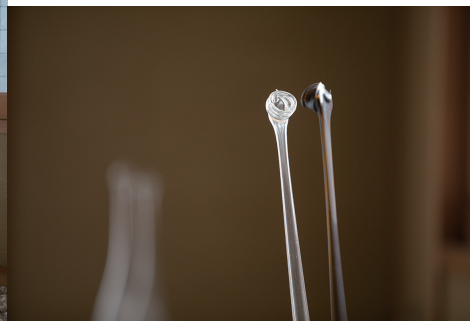
2020 「京都府新鋭選抜展」、京都文化博物館、京都

2019 「untamed vol.1」、COHJU contemporary art、京都

2019 「六甲ミーツアート芸術散歩2019」、六甲山周辺、兵庫



記憶の庭園



- statement -

私は窯を使用してガラス瓶を変形させ作品制作をしている。変形させる際には自分の手を使うのではなく型に入れてボトルの自重によって変形させている。窯から出てきたガラス瓶はもう元々の用途で使用できない程に変形しているのですが、生命感を感じる形になっている。今回はガラス瓶が違う形となって再び地に降り立つというようなコンセプトで枯山水をモチーフに和室に庭を展開している。

■ 出展作品



玉木 和葉 Tamaki Kazuha

1997年 生まれ。三重県出身。大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。

【近年の主な展覧会】

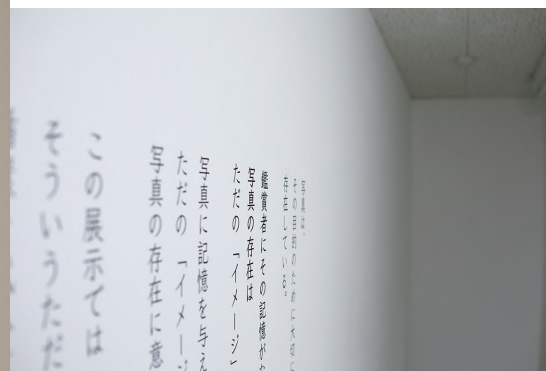
2020「大阪芸術大学卒業制作展2020」、大阪芸術大学、大阪



写真は、
その目的のために大切に撮影され
存在している。

- statement -

私の祖父母はみんな早くに亡くなっている。自身の成長とともに彼らに関する記憶はどんどん薄れ、祖父母たちが写っている写真も記憶が伴った「写真」から、ただの曖昧な「イメージ」になっていった。この作品では、「イメージ」と「写真」との循環を試みている。記憶の有無で写真の見方・見え方は変わる、記憶は物に宿るという考えのもと制作した。記憶を継いだ遺品とその持ち主の写真を見ることで、鑑賞者にはないはずの記憶を共有し、「イメージ」から「写真」になる過程を体感してほしい。



遺されたものは、記憶をなくし、イメージになる

■ 出展作品



土取 郁香 Tsuchitori Fumika

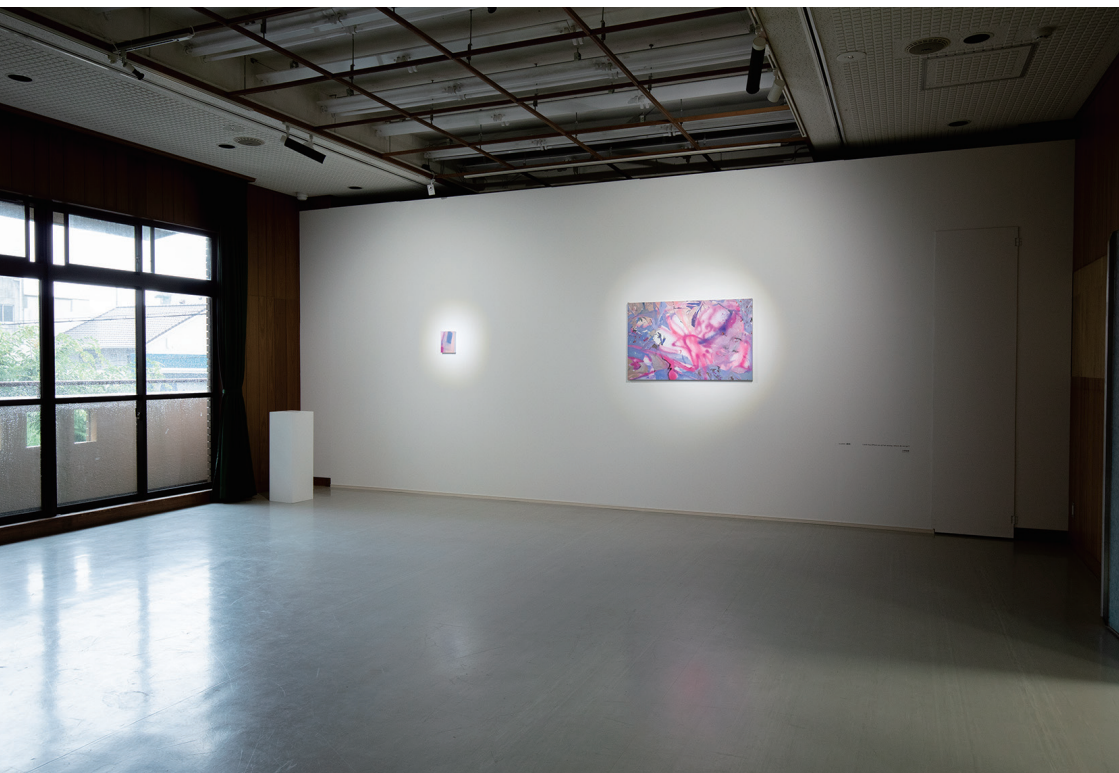
1995年 生まれ。兵庫県出身。京都造形芸術大学大学院美術工芸領域修了。

【近年の主な展覧会】

2019 「京都アートラウンジ」、スターバックスコーヒー三条大橋店、京都

2019 「Shibuya STYLE Vol.13」、西部渋谷店美術画廊、東京

2019 「Innocent -P-」、国立京都国際会館、京都



- statement -

大切なものの大切な仕方は変わってしまったらどうか？ それとも何も変わらないでいる？

悪夢のような現実のなかで物質と向き合うこと。悪夢に取り憑かれないために。



I and You (When We all fall asleep,where do we go?)



a scene (幕間)

■ 出展作品



山口 芽生 Yamaguchi Mei

1997年 生まれ。大阪府出身。京都精華大学芸術学部立体造形コース卒業。

西川 涼香 Nishikawa Ryoka

1998年 生まれ。大阪府出身。成安造形大学美術領域現代アートコース卒業。

【近年の主な展覧会】

2019 「ニッ」、オルタナティブスペースyuge、京都(ユニット)

2019 「MOUNTAIN OF THE TOP」、妙満寺、京都(山口)

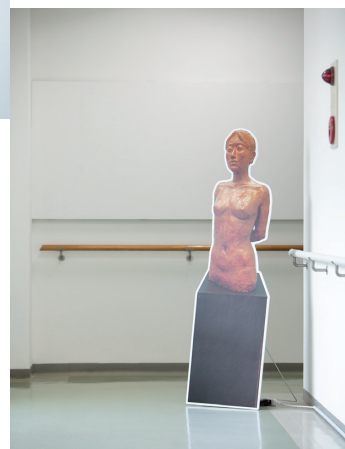
2019 「...」ギャラリー@KCUA、京都(西川)

彫刻の行方



- statement -

制作した彫刻を持ち出し、共に旅行をした作品。あくまで塑像制作の延長線として行われた沖縄旅行の中で、彫刻が現地の方に引き取られ姿を消してしまった。展示では、制作と旅の様子をドキュメンタリー的に見せ、彫刻の行方を追う。「彫刻の不在」を表しながら、彫刻の実体性とは何かを言及したい。



■ 出展作品



吉岡 優輝 Yoshioka Yuki

1997年 生まれ。大阪府出身。大阪芸術大学デザイン学科デジタルアートコース卒業。

【近年の主な展覧会】

2019「第30回 日韓交流作品展」、大阪芸術大学、大阪



beat city

- statement -

音と映像をシンクロさせた映像作品。モーショングラフィックスは既に世の中に普及している映像の分野であるが、自分が得意とするイラストレーションを織り混ぜることによって、モーショングラフィックスにおける新たな可能性を切り開くことを目指した。音楽に乗せた街の光は楽器のようにも思える。



ジハンキ、夕方、79階のたばこ屋

A-Lab Artist Talk

出演 コーディネーター：おかげんた（タレント（吉本興業株式会社所属）
アートプランナー、A-Lab アドバイザー）、坂本大地、大東真也、玉木和葉
土取郁香、西川涼香、山口芽生、吉岡優輝
日時 令和2年6月13日（土）15時～17時
場所 あまらぶアートラボ「A-Lab」



オンライントークの様子

おかげんたさん（以下：おか） みなさんこんにちは！本日は「A-Lab Artist Gate 2020」の出演アーティストの方々とギャラリートークを生配信でお届けしたいと思います。さっそくまずはアーティストの方をご紹介します。アーティストの方はこちらの方でございます。土取郁香さんです。土取さん、よろしくお願ひいたします。

土取郁香さん（以下：土取） よろしくお願ひします。土取郁香です。京都造形芸術大学大学院のペインティング領域油画コースを3月に修了しました。普段は油画を制作しています。

おか 大学ってそれぞれ違った特徴があると思いますので、どんな大学なのか画像を交えて教えてください。お願ひします。

土取 卒業制作展のときに展示をしながら販売をするというアートフェア形式をとってまして、コレクターの方とかギャラリストの方とかたくさん出入りするような学校になっていて、それが特色かなと思っています。最近では学外でも販売したり、そういった機会を設けていただくことも増えてきました。

おか 体験してどうでした？

土取 最初はコレクターさんもいろんなことをおっしゃるので、意図することと真逆のことを言われたりして、

混乱したりすることも多かったんですけど、客観的に自分の作品を見て考えるすごくいい機会だったと思っています。

おか そうなんです。コレクターさんって言いたい放題なんです。なぜかといいますと、作品を購入することがあるのでお金がかかってきますからね。それと何年かコレクターをしていくといろんな知識が入ってきてアーティストさんにこういうのがいいよとかアドバイスしたくなるんですよ。きつとお話を伺って参考になったこともあったんじゃないでしょうか。それでは作品のご説明をお願いいたします。

「夢」をテーマに

土取 今回は2枚組みの絵画を展示しています。[I and You] というシリーズと [a scene] というシリーズを並行して普段制作しているんですけど、ラッカーズブ



レーを使用して、油絵具と併用して描いています。抱き合っていたり、親密な距離の二人を描くのが [I and You] シリーズです。もう一つの小さい方、[a scene] シリーズは、「a scene- 幕間」というタイトルにしていますが、自分が見た風景を抽象的にシンボリックに描き出すようなものが [a scene] のシリーズになっています。

おか 何か風景というモチーフがあるということですか？何かイメージといましようか。

土取 いつもは何かモチーフがあるのですが、これは「夢」をテーマにしているので瞬きのような、風景を目を細めて見たときの光を描いているのかなと思います。

おか なるほど、光を取り込んだ形の作品だということですね。黒いところには何かもがあったりとかそういうようなイメージで。いいですね、何かこれからの春から夏にかけてのこの季節、瞼を閉じたときの光みみたいなものを見る機会が非常に多くなってきます。そして今回この2点を展示しておりますが、やはり何かこの2点を合わせた意味合いはあるんですか？

土取 そうですね、いつも何点か同時に制作をするのでこれとこれは関連性があると思ったものを同時に展示していたりします。これも色合いとか夢をテーマにしているところで同時に展示して、この展示している間の距離とかも大事に展示しました。

おか 展示室の入り口すぐ右のところにありますが、いわゆる壁一面を使って展示をしている状態になります。今回展示してみてくださいか？

土取 思っていたより壁が大きくてびっくりしました。海外のギャラリーみただなと思って、それはすごい良かったです。

おか 尼崎市はある意味海外のような驚きがいっぱいある街ですからね、ぜひとも尼崎市も楽しんでいただきたいと思います。土取さん、ありがとうございます。続いてはこちらの作品になります、自己紹介をお願いします。

坂本大地さん（以下：坂本） 坂本大地です。大阪芸術大学の大学院の工芸領域を修了しました。

おか 作品はこのような感じでございます。一見何かは

分かるはずなんです、これが何でできているのかというのは後のお楽しみです。それでは大学のお話をよろしくお願ひいたします。この写真は？

坂本 大学院の染織の作業場になります。



おか 広いですね、けっこう。

坂本 そうですね、かなり広くて自由に使える施設になってます。

おか 普段はどの辺りをお使いになっているんですか？

坂本 カーペットの上あたりで、左の壁に作品を貼ったりしていますね。

おか そうですね、左に作品がありますね。だいたい何人くらいでシェアしているんですか？

坂本 今は大学院生が4人くらいいますが、僕が入った時には僕しかいなかったその部屋を独り占めさせてもらっていました。

おか この広い空間を独り占めですか。すごいですね。こちらの画像は？

坂本 こっちは作品の制作で藍染めをして、それを干しているところですね。



おか きれいですね。これはどれくらいの期間干しているんですか？

■ アーティスト・トーク

坂本 1日くらいですかね、半日で乾く日もあれば、天気がいい日はすぐに乾くので。洗濯物を干す感覚で洗っては干してを繰り返しています。

おか お家が染織のお仕事をされておられるとか染織などの家業に携わっておられるというわけではないんですか？

坂本 そういうわけではないです。一般の家庭で、大学から染織を始めました。

おか なぜ染織を専攻されたんですか？

大学入学後染色を

坂本 大学に入学して、最初に染織と金属加工、工芸、ガラスの4コースがあって、染織をやらしてもらったときに結構おもしろいなと思って、これが自分に合ってるかなと思って4年大学でやってそのまま大学院で2年染織のまま入ったという形です。

おか やってみておもしろかったですか？

坂本 めちゃくちゃおもしろくてこんなにハマったものもなかなかないというくらいはまりました。

おか 写真は他にもありますか？

坂本 大学の卒業制作の写真です。

おか うお、きれい！これはなんですか？



坂本 これは浴衣ですね。大学の頃は浴衣をメインに制作していたので、浴衣ばかり作っていました。

おか 自分で着たりも？

坂本 たまに着たりもしていましたが、作ったら壁に飾って見て満足という感じでしたね。

おか 自分で展示、ディスプレイしてみてこれでよかったなーという思いがそこにあるわけですね。こういった形でですね、染織であらゆるものをこういう色鮮やかな

ものとか制作されているわけなんですけど、さきほどちらっとみなさんに見ていただいたと思うんですが、これは大きな鯉ですかね、鯉のこの姿、これがいったい何でできているのかというと、金魚すくいをするときの「ポイ」なんです。これを使ったインスタレーションで魚を表現をしているわけなんです。ひとつひとつではないんですけど、何枚かにこういうような鯉の柄が入っていますね。これはどういった思いつきから？

坂本 大学の間はほとんど人間サイズのものを作っていて、大学院に入ってから新しい制作をしようと最初はパネルに布を貼って作品制作をしていたんですけど、展示場所によってサイズが制限されたり、場に合わない雰囲気にするのが悩みになっていて、小さい作品をいっぱい集めることで何か作品にできないかなということ、自分自身金魚すくいが好きなので、金魚すくいが終わった後のポイに布を貼ったらいい感じのパネルの代わりになるんじゃないかなと思って始めました。



おか この季節涼しげでもありますが、ポイというのは破れたら捨てられるという非常に儚いイメージもあって、そういうちょっと寂しいところもあったりしますね。例えばお祭りのときなんかも夜店にたくさん金魚すくいがあって華やかな場所にある反面、そういった何か運命があったりするのかなという。ちょっと考え過ぎかもしれませんが、これはちなみにポイはいくつくらい使用されているんですか？

坂本 今ある分は2000以上はあると思うんですけど、途中から数えるのが嫌になって数えてないんですけど。

おか 2000以上あるんですか！？それは嫌になりませんか。これはプラスチックの持つところが鱗の形に見え

るんですが、その線があることによって非常に立体的に見えますね。そういった形でこのインスタレーションができるということで実にお見事です。このお部屋はこういった形のお二方の作品になります、ありがとうございました。これが一つの展示室で、そして部屋を出たところにも作品がござります。こちらにそのお二人がいらっしゃると思います、よろしくお願いたします。



西川涼香さん (以下:西川) 西川涼香です、成安造形大学の現代アートコース卒業です。

山口芽生さん (以下:山口) 山口芽生です、京都精華大学立体造形卒業です。

おか お二人の大学の写真はありますか？



西川 私の大学は滋賀県にある大学で、キャンパスから琵琶湖が見えるようなすごいゆったりとした空気が流れていて、学生の数も少ない静かな大学です。大学の特徴はもう一つあって、大学がギャラリーを運営していて、大学内にいろんなギャラリーが点々としていて、いろんな展覧会が大学で催されて、学生の作品が見れたりします。私も展示させてもらったりしました。

おか 経験として積み重ねることはいいことですよ。この写真は？

西川 これは個展の時の準備段階の写真なんですが、好きなようにこのギャラリーが使えます。



おか いいですね、実際にこういった空間で自分のイメージが立てられるというのは。続いて山口さんお願いします。

山口 これは京都精華大学で私が主に作品を作っていたスペースなんですけど、結構スペースを多く使わせてもらっていて、基本的に学生が自由にいろんなものを置きながらやれるので、のびのびとやらせてもらっていた風景が分かりやすいと思って選びました。



おか なにかゆったりとした空気が流れている雰囲気はしていますけどね。

山口 ちょっとごちゃついてはいるんですけど、そこも精華らしいのかなと思いつつながら。言っていないからないですけど。

おか 真ん中の端にストーブもあっていい雰囲気ですね。

山口 山の方なので、めちゃめちゃ寒いのでストーブがないと凍えますね。

旅の一部始終を

おか それでは作品を見ていただきたいと思います。これはどのような作品でしょうか？

山口 私たちは自分たちが作った彫刻を実際に沖縄の旅行に持って行って2泊3日の旅をする一部始終を今回展示しております。彫刻作品を中心に一連の流れだとか、旅の中でいろいろ面白いことも起こって、そこも見所の一つとしてドキュメンタリー的な映像も展示させていただいています。

おか この写真は？



山口 これは美ら海水族館にも行かせていただいたんですけど、入館が難しいと言われまして。バスなんかは彫刻を持っていても入れたんですけど、美ら海は「ちょっと厳しいです」となってしまって、ご厚意いただいて写真を撮ってもらって額装していただいた写真です。

おか そうですね、逆に主役が変わってしまいますからね。沖縄を選んだというのは何か意味があるんですか？

山口 奇抜なことをするので、あまり煙たがられないというか、大らかなところがいいなと思って沖縄を選ばせていただいたところがありまして。

おか いいですよ。沖縄というところは、大らかな気持ちになりますからね。ありがとうございました。続いては倉庫という場所があります。この中に作品がございます。玉木さんでございます。それでは自己紹介よろしくをお願いします。

玉木和葉さん（以下：玉木）玉木和葉です。大阪芸術大学の写真学科を卒業しました。今は大阪芸術大学大学院に在籍しています。

おか ありがとうございます。それでは大学のお写真をお見せいただけますでしょうか？



玉木 これは写真学科の棟の前の写真です。シャボン玉にはまって、みんなで遊んでいるところです。

おか 3人で楽しそうですね。

玉木 あとはゼミ室の前ところにゼミ生で作ったZINE(個人制作による冊子)の広告を貼ったりしています。

おか これは？

玉木 こんな感じで、実際に作ったZINEの写真です。



写真とイメージを行き来

おか いいですね、この表紙の雰囲気というか。それでは作品に関してのお話をお聞かせください。

玉木 まず、写真はその写真に関する記憶がないと、ただのイメージで終わってしまうと考えています。動画に映る人物は私の母方の祖父とその弟で私の大祖父にあたる人です。2人とも私の生まれる前に亡くなっているのですが、祖父の遺品に触れたり母から話を聞くことで、私にはないはずの記憶が作られたような気がしました。反対に、大祖父の遺品は全然残っていないで、写真が数枚あるのみで彼の記憶を作ることは難しいです。このように記憶の有無で『写真』とただの「イメージ」の境界

を行き来する、ということを感じてほしいと思い作りました。

おか イメージ的に一人の方を紐解いていくプロファイリングのような感じがしますね。作品制作をしていて何か気づくことはありましたか？

玉木 そうですね、私にとっては知っている人なんですけど観る人からしたらやっぱり他人は他人であって、私の体験をどうしたら観る人と共有できるのだろうという難しさはありましたね。

おか こういった作品で皆さんと共有できるというか、一つの手段としての展示になっているということですね。今回これはどこかで発表した作品なんですか？

玉木 大阪芸術大学の卒業制作展で展示しました。

おか みなさんの反応はどうでしたか？

玉木 「死」を感じるのでなんだか悲しい作品だとか、あとは私の祖父の世代の方が声をかけてくださることが多くて、遺品の写真を見て懐かしんだ方からは昔の話が聞けたりしました。

おか 誰しもがもっているものですからね、その辺りのところを形にしたというのが今回の作品ということですね。探究心があって面白いですね。ありがとうございます。廊下には、モニターが置いてありまして、こちらでは作家さん本人による作品についての解説や、今後のアーティストの活動についてのインタビュー映像が流れています。そして廊下を進んでいくと、新しい展示室がありましてこちらは吉岡さんの作品です。吉岡さんはご自宅からですね、吉岡さんお願いいたします。

吉岡優輝さん（以下：吉岡）吉岡優輝です。大阪芸術大学デザイン学科卒業です。

おか 今現在はこちらにいらっしゃるのですか？

吉岡 今は山梨ですね。

おか ということは山梨が生まれ故郷ということですか？

吉岡 生まれは大阪なんですけど、就職を機に山梨に移住したという形です。

おか それでは大学生生活の写真を見せていただけますでしょうか、よろしくをお願いいたします。これはどういう場所ですか？



吉岡 これは大学の一番メインの通りになっています。玄関口に近い方になりますね。

おか ここでどういったことを吉岡さんはされているんですか？友人と待ち合わせをしたり、話をしたりする場所ですか？

吉岡 そうですね、待ち合わせもできますし、イベントなんかもやっていて、音楽系のサークルなんかライブをやったりするのでいろいろな催しが行われていたりしますね。

おか いいですね、楽しいですね。次の写真は、何か三口のヴィーナスのようなものが奥にありますけど。



吉岡 そうなんです。何かはよくわからないんですけど。

おか 右側は学校の校舎になるんですか？

吉岡 そうですね、校舎になります。

おか 左も？

吉岡 左は食堂になります。

おか すごくおしゃれですね。

吉岡 たぶんここが大学で一番おしゃれな場所なんじゃないかと思います。

おか さきほども学食が美味しいという話が出ていましたが、大阪芸術大学はどうですか？

吉岡 安くて美味しいですね。

おか 例えばうどん 1 杯、200 円とか 300 円とか？

吉岡 250 円くらいですかね。

おか 安いですね。また自然があって木漏れ日があるのもいいですね、続いては何でしょうか？

吉岡 これは比較的新しい建物になるんですけど、学生たちが自由に展示できるスペースというのがありまして、それがこの展示ギャラリーになります。

おか この左側のガラスになっているところが展示できるスペースですか？

吉岡 そうですね。

おか 展示されてみてどうでしたか？

吉岡 直に見ていただいた方の感想を聞くことができたのはすごく良くて、モチベーションがとてまがありました。

音楽を目でも楽しむ

おか やっぱ作品というのは観てもらってどんどん育っていきますからね。ありがとうございます。さあ今ちょうど展示作品を見ていただきましたけども、このような作品が廊下にあります、メインの作品はこちらの部屋の中にあるんですね。こちらの作品どういった作品でしょうか？

吉岡 これは自分のイラストを映像にした作品でイラストレーションとモーショングラフィックスを用いて音楽を目でも楽しもうというコンセプトに基づいた作品になります。

おか この風景は架空の風景ですか？

吉岡 架空のものになります。

おか 看板だらけですかね。

吉岡 そうですね、描くのがすごく大変でした。

おか すごいんですね、看板を一個一個みていると、「タレムコ」とか「イマノヤ」とかあまりよく分からないような、大阪なのかなって分かるのが左に「おおきに」って描いていますね、居酒屋さんですね。これって制作日数はどれくらいかかるんですか？

吉岡 半年くらいですね。

おか 半年！？自分の描いたイラストレーションに、

光ったり動いたりするアニメーションをプラスしていくわけですね。

吉岡 そうですね。

おか 作業的に一番難しい所ってどういう所なんですか？

吉岡 イラスト以外の部分で図形がアニメーションしている部分があるんですけど、そこを作るのが難しかったですね。

おか みなさんに見ていただきたい部分を教えてください。

吉岡 やっぱり全体を通して観ていただきたいというのが一番ですね。2 分半くらい映像があるんですけど、途中で飽きてしまわないようにどんどん派手にしていく演出にしている、とりえず一通り見ていただきたいなと思います。

おか そうですね、後半の方になってきたら大きなドットがでてきたりとか画面が弾けるような演出もありますからね。これ一個一個寄るとよくわかるんですけどほんと面白いんですよ。ちょうど真ん中の下にある「カゼに効く」って書いた看板があったりとか、カラオケがあったりとか、様々なものがあります。これをみなさん会場に来て見ていただきたいと思います。ちなみにこの打ち込みの音楽はご自分で作ったんですか？

吉岡 これは作曲者の方をお願いしてお借りしております。

おか いい音楽ですね、ありがとうございます。

吉岡 ありがとうございます。

おか 最後は和室になります。大東さんですね、普段見る和室の感じとはちょっと違うような感じですね。よろしくお祈りします。それでは自己紹介をお願いいたします。

大東真也さん（以下：大東） 京都精華大学の大学院の立体造形コースを卒業しました大東真也です。よろしくお祈りします。

おか それでは大学について教えてください。

大東 自分のコースだけでもいいんですけど、けっこう自由に色々させてもらえるので、アイデアがどんどん湧いてやる気がある学生はたくさんおもしろいもの

を作っているという印象があります。精華大学はいい意味で常識はずれといいますが、めちゃくちゃができる大学ではあるのかなって自分の中では思っています。

おか いわゆる冒険させてくれるということですよね。大学の4年間と、大学院の2年間の6年間はいかがでしたか？



和室に枯山水の雰囲気

大東 けっこう自分の中ではいい6年を送ったというのがありまして。最初の2年は全然制作もしていない学生だったんですけど、色々あってやる気をだしまして。今に至ると感じる。

おか その色々あったというのは後で聞けるかもしれませんがね。今回和室を選びました。和室って難しかったですか？

大東 最初はちょっと嫌だなと思ったんです。けどそれはいい意味です。難しいけど上手くやればいい展示ができるのではないかなというのは最初下見に来た時に思っています。ここにしようかなと考えていたところ A-Lab さんからも和室でというお話になったので今回ここで展示させていただいています。

おか もともと畳の部屋ですが、畳をあげて石を敷いております。奥にはしつらえの場所にお軸のように作品を吊るしているというような作品もありますが、これはどういった作品なんですか？

大東 今回は和室で日本庭園をモチーフにした枯山水のような形で展開しています。自分はガラス瓶を溶かした作品を制作しています。瓶を溶かす時に、自分の手を使わずに窯任せで型に入れたり、瓶を吊るして溶かしてい

るんですけども、吊るす作品というのは、いわゆる宙吊りにした状態で窯に入れているんです。熱によって自重でどろっと溶けるような形で作品を制作しています。瓶本来の用途を失って、まったく違うものになって窯から出てくるんですけど、それがリサイクルとは違う形の「生まれ変わり」のようなところをコンセプトにしています。なので瓶という存在がまた新しい地に降り立つというイメージで石の上に置いているような作品になっています。

おか 枯山水の「枯」のイメージがこの雰囲気にとりな気がするんですね。今までこのようなインスタレーションのような形で展示はされたことはありましたか？

大東 室内でがっつり一つ作ってしまうというのは今回初めてでした。

おか 自分の中で発見ってありましたか？

大東 今までは単体でオブジェ的な作品を作ることが多かったんですけど、空間へのアプローチをすることによって作品のスケールが大きくなるなと感じたので、それが次のステップになるのかなと思います。

おか そうですね、これが次の展開ではどうなるのか楽しみになる作品ですね。ちなみにこの敷いている石は何キロくらい使っているんですか？

大東 全部で300kgくらいですね。

おか 300kg!?! すごいですね。これもいい機会ですよね、1 つの挑戦というか、プレゼンテーションにもなりますし。ちなみにここに座布団があるんですが、座布団とこの雰囲気がなんとも言えませぬ。ありがとうございます。

制作のターニングポイント

おか みなさんの作品と大学、そして人となりみたいなものをご説明して楽しんでいただけたと思いますが、次はターニングポイント、つまり大学生活の中でどんなことが起きて今現在の作品に至っているのかということをお話していただきたいです。それでは土取さんよろしくお祈りいたします。ターニングポイントはなんですか？

大学院入学

土取 「大学院入学」です。

おか 大学院入学がターニングポイント？詳しくお話しかせてもらえますか？

土取 うちの大学院のペインティング領域の油画コースは、入試の時に先生から「アーティストになる気はありますか？」という質問が必ずされるようになっていまして。結局ならないで就職する子とかもいるんですけど、アーティストになる人が多いです。学部の時はずいぶん自由な作っているんですけど、大学院入学はアーティストとしての作品というのはどういうものなのかを考える良いきっかけになったのかなと思います。

おか それはやっぱり周りの環境がそうさせたということですか？

土取 そうですね、最初にも少し話しましたがコレクターさんとかギャラリストの方も半月に多くて7回とか来られて作品を見てくださいます。

おか 我々コレクターの人はくちやかましい人が多いですからね。人によったら「これはもうちょっとこうしたらいいのにな」とか「こうしてほしい」とか、「こんな作品を作って欲しい」というコレクターの方もたくさんいらっしゃいますからね。

土取 去年の5月の時にコレクターさんが15人くらい一度に来る時があって。そういう機会があるというのはすごい恵まれているなと思います。

おか 外部の方に作品を観ていただいたということが自分自身にとってのターニングポイントになったということですね。

土取 周りの先生とかクラスメイトともそういう話をするので、そういう環境に身を置けることは大事ななと思いました。

おか 写真の作品は男女ですか？

土取 これは男の人と男の人ですね。男性と女性もあるし、男性と男性もあるし、女性と女性もありますね。

おか 何かやっぱり「二人」というものをこういった形で画面上に表現することで土取さん自身が何かその中で見出せるものがあるということですか？

土取 そうですね。最近そうかなと思ったんですけど、自分の中に無意識に入ってくる情報を絵画にするような作業かなと思っていて、やっぱり自分が気になったものとかしか絵に描けないなと。そういうものがどうやって表現になるのかなということも大学院に入って考えられて良かったことかなと思います。

おか ある意味自分への落とし込みというか、そういったことは、もちろん大学に入学した時の当初とまた違う気分だとは思いますが、卒業するとどんな気分ですか？

土取 あらためて孤独な仕事だなと思います。

おか 今回もこういう形で生配信ということを見せていただけてますが、なかなかみなさんお仕事という面では厳しい面がありますからね。我々コレクター、アート関係者のみなさんたくさんいらっしゃいますけどもそういう方々はやっぱりアーティストの方々が続けて作品を制作していただくということを望んでいますし、そしてアーティストの方々もそれで成長することでたくさんの人に観ていただけるという、そういうことにつながっていくと思います。今回展示した作品は卒展の時の作品でしたか？

土取 今回用に新しく作りました。卒展の時は、この写真の作品です。大学院で使えるギャラリールームがあるんですけど、そこを一人で使わせていただいて150号2枚組と変形のF80を2つくっつけたサイズのもの。

おか これはアクリルですか？

土取 油絵具とラッカースプレーがメインです。卒展のときはこんな感じで個展をさせていただきました。

おか 具象の作品、二人一緒になっている作品が右側に展示されていましたけれど、ちょっと抽象的なイメージも入っているのかなと思うのですがいかがですか？

土取 そうですね、写真を元に、具体的なものを見ながら描いているんですけど、うまく抽象的な画面に落とし込むというか、いろんなものを見て想像できるような画面作りをしたいなと思っているので、自分の無意識で良いと思ったところで止めるとかそういうことを大事に描いています。

おか 写真を見て、ということをおっしゃいましたけども、例えばこれはもちろん自分が作品を作るからこう



いったお写真をご覧になると思うんですけど、例えば趣味というか、好きな写真や映画や、食べ物であるとかどういったものに興味がありますか？

土取 そうですね、映画とか本とか音楽とかそういうものは好きなんですけど、最初にお見せしたピンクの絵とかは、SNSにあがっていた写真を元に描いていて、それから映画のシーンを元に描くシリーズに発展して、最近は知り合いの子にポーズをとってもらってそれを見ながら描いていたりします。

おか 1つお聞きしたいんですけど、その映画のシーンというのは、その作品を見てこれを作品にしたいなという形、それか見て感動したなと思って、これでちょっとなにかしてみようかなと思うのとどっちですか？要するにモチーフとして見てしまうのか、趣味として見ていたものが感動したからそれを自分の中でもう一度再構築させたような形にさせたいのか。

土取 再構築する方ですかね。見てインプットして、感動して再構築するという形じゃないかと思います。

おか 作品を観て実際にお話をうかがってよく分かりました。そういったものの興味の中から落とし込んで作品を制作している。それが大学院に行ったらさっぱりとときに様々な刺激によってその落とし込みというのが自分の中で構築されたという流れがすごくよく分かりました。今回このような形で展示をしてみようとしたか？

土取 修了展もライティングにこだわって展示したので、ライティングに時間をかけて頂けてありがたかったです。ライティングと、大きな窓からの外光を組み合わせるのが難しく面白い作業でした。

おか 先ほどもお話しの中に出てきましたが、大きな展

示壁面ということでしたが、我々なんか見てたら作品というのは、負けない。つまり1つの壁面の中でたとえ小さな作品でも壁を支配してしまうような平面作品であったりとか。お笑いの仕事でも歌手でもそうですが、お客さんが10人でも1万人でも例えば5万人でもそこに負けないような形のもを表現するというのがお互いそういった仕事だと思うんです。そういった意味でいうと、あの壁面は自分の中では勝負できたなという感じですか？

土取 そうですね。今回感染症対策で窓を開けるという話があって、そこに壁が立てられなかったのでホワイトキューブの形にしようと思っていたんですけど、いい感じの空間になったのでそれはすごいよかったですね。

おか そうなんですよね、みなさんアーティストの方々がよくおっしゃるのは偶然の産物でその現場に行ってみたらこうなったのでこうしようということが、特にこのA-Labの場合は多々ありまして、倉庫であったりとか和室であったり。そういう空間の中に自分が持って行って、8割くらいできているんですけど、後の2割は現場で処理をするというような形で。今回それがすごく良い形にできて良かったですね。ありがとうございました。続いて坂本さんをお願いしたいと思います。坂本さんのターニングポイントを教えてください。

藍

坂本 「藍」です。

おか 藍というものに自分の中で心動くものがあつたということですか？

坂本 先ほどの話でもありましたが、4コースやらせてもらうときに、最初にしっかり染物をしたのが藍染だったんです。型染めで布が染まらないようにした後に、藍染めをして、染まらないところだけが白で浮きあがるという、ほぼほぼこれと同じような制作をしていたのが、大学に入ってすぐの時と、大学院に入ってからは大学の4年間は藍染め以外をやっていたんですけど院に入ったらまた藍染を再開したので何かしら環境が変わる時に藍が関わってるなと思っているので藍かなと思います。

おか 坂本さんが最初に藍染をやったときから4年が経って、藍染を多分客観的に見る事ができたと思うんですが、藍染というものに対して何か変化はありましたか？

坂本 最初に藍染めをしたときは、学校の先生方が藍を建ててくださって浸けたら染まるだけの状態になっていたんです。藍を「建てる」というのは、染める液を作るときに使う言葉です。院に上がってからは自分で布を選んで、藍を建てる工程から染めるまで。そしたら日によって色が変わるんですね。

おか 日によって色が変わる？

坂本 暖かい日は藍も元気になって、すごい良い色になったりして。でも冬とかの寒いときは、藍って暖かくなくと染まりにくいところもあって、なかなか染まらなかったり。そういうことを自分でメモしたり記録に取ったりして、一番自分の好きな色に染められるようにするには、何回もやってみないと分からないものなんだと大学院の2年間では勉強しました。

おか その「良い色」というのは、「鮮やか」という意味合いですか？

坂本 そうですね、鮮やかというものもあるんですけど、その時々自分が欲しい色というのがあったりして、くすんだ布にしたいときはちょっとこの藍を増やしてくすませようとかを考えるので、藍独特の色と言った方がいいですかね。

おか 例えばその藍染、藍にまた改めて向き合った時に自分の中で弾けた部分ってありますか？感じたことというか。

坂本 染まるもの、染まらないものというのがあってポリエチレンとかシャカシャカした服のナイロン素材はあまり染まらないんですけど、綿とか麻とか植物系のものは染まりやすく発色も良かったです。例えば和紙とか紙コップとかも、染液に浸けたらここまで藍色になるのかということも結構あって、紙で染められるんだっていう驚きがすごかったですね。あと染める工程で手袋をして作業をしますが、手を藍の中に入れて出した時手袋が外れたときがあって。その時手首まで藍色に染まってしまって。風呂場で全部落とそうとしますが、肌と爪

は素材が違うので爪だけ落ちないんです。藍染の色でネイルをしたみたいに落ちなくて爪が生え変わるまでずっと藍色でした。そういう素材の違いも勉強になりました。

おか いざ作品制作ということになりますとまた少し理屈が違うんじゃないですか？

坂本 そうですね、そのときどきで決めないといけないことが出てくるので、かなり神経を使いますね。

おか 紙でも染まるということでしたが、これから他の素材を使ってやってみたいというのはありますか？

坂本 今回ポイという平面のものを立体的に表現することがちょっとだけでき始めたかなと思ったので、立体のものを染めるということではいいのか。立体物を藍の中に入れて染めてみたいかと考えています。

おか 坂本さんにとって、「藍」というのは伝統工芸のようなイメージなのか、それともコンテンポラリーなイメージとどちらが強いんですか？

坂本 自分の中では伝統的なものというよりちょっと新しいもの。これまで培われてきた型紙などの柄は使いつつも新しいものに挑戦しようという感じです。

おか 藍というものに出会ってからご自身が藍だけじゃなくいろんなものに興味が湧いてきたという、視野が広がったという意味ではすごくいい出会いだったんですね。ありがとうございます。続いては西川さんと山口さんよろしくお願ひいたします。ターニングポイントは、「彫刻部」と「ゼリー」ですか？

彫刻部とゼリー

西川 高校の話になるんですけど高校も美術専門の高校で、部活動が色々あるんですが、スポーツとかの部活じゃなくて、彫刻部とか絵画部とか染織とか陶芸とかって美術の分野の部活がたくさんありました。私がいた彫刻部は、顧問の先生が日展の人体塑像の先生だったので、今の作品で作っているような粘土から人の形を作ってなぞって、樹脂や石膏とかブロンズに置き換えるということを高校の時からずっとやっていました。そのときはあまり気づいていなかったかもしれないのですが、作品が作られる過程、粘土で原型を作って、石膏をかけて、中の粘土を取り出して、石膏型に樹脂を流して、最後は石

膏型も壊してみたいな、最後の作品を見ただけでは分からないような工程、完成された作品よりも作品制作における工程とか過程に興味を持ちました。



おか 過程のどういうところに興味を持ちましたか？

西川 まずやっていて楽しいというのがありますね。姉が2人いて同じ高校で大学も一緒だったんですけど、姉はどちらかというイラストとか絵画とかの「描く」ほうで、私も小さい時から絵を描くことは好きだったんですけど、「描く」という動作に飽きてしまうというか、そういうことを昔から感じていました。でも彫刻は1つのものを作ることにいろんな工程を挟んでいろんな素材と関わりあいながら1つのものを作っていくので、そこに興味がありました。

おか ありがとうございます。次はゼリーということですけども。

山口 私も高校から大学にかけて彫刻と関わってきました。今回の作品でも出展しているような人型の彫像をずっと取り組んでいます。彫刻って粘土で作ったものを石膏とか樹脂に置き換えますが、大学の2年生くらいの時にゼリーに置き換えたらどうなるのかなって急に思い立って。プルプルしたものとかなったらおもしろいかも、ゼリーにしてもいいじゃないかって。頭の型を取ってその中にゼリーを流し込んでゼリーの頭部を作ったことがあるんですけど。そういうべちゃっとした彫刻を作ったりしたことがあって、それは作品としてのクオリティは高くなかったんですけど、彫刻って柔らかくてもいいし、プルプルでもいいし食べられてもいいみたいな、自分の中ですごい自由度が広がったというか。それが多分今につながって、単純に彫刻は展示することだけでなく一緒に旅をして、「物体じゃない彫刻」になることもできる、そういう思考になる1つのターニング

ポイントだったのかなと思います。

おか 根本的なお話を聞きますけど、なんで二人でこういうことをしようと思ったんですか？

山口 私たち正直あまり彫刻をつくるの上手くないなって、二人で話していたんです。これから先、彫刻を真っ当に作っていて面白いことがあるのかなって思っちゃって。もっと上手い人はいるし、もっと人体を魅力的に作る人はたくさんいて。その中で自分たちがしたいとができるとかそういうものを見つけていかないといけないという想いになっていたときに、彼女（西川）が彫刻の過程に興味を持っていたりだとか、私が彫刻はいろんなものになれる、柔軟な彫刻を生み出していきたいみたいな気持ちがあって。そこが2つ気があったというか、馬があったこともあって。でもあ個人的に沖縄旅行っていいなって話になったりして、そこで彫刻と旅行を組み合わせて何かできるだろうかって考えてこういう風今回なったという感じですね。

おか 映像を見ていただいたら分かると思いますが、後半ほとんど二人旅になっていますね。

山口 そうですね、彫刻を道中で手放してしまったので、その後はもう二人で沖縄をエンジョイしている始終になってしまうんですけど。ただそれは単純に彫刻が単純になくなったという話ではなくて、多分彫刻が別の形になってまわりついて、旅行についてくる感覚が続けていました。ちょっと難しいですけど。別の形の彫刻を生めたくないかみたいな手応え、という大げさなんですけど。

おか 沖縄という場所は、私も吉本で沖縄国際映画祭やヤンバルアートフェスティバルでも行かせていただくんですけど、いわゆる陶芸とかそういうものに関して沖縄の人は生活に密着しているのですごくラブリーなんです。例えば平面とか描いているところでもなかなかギャラリーで展示するところってというのは少なくなくて、例えばカフェであるとか、ご自宅であるとかそういう会社であるとかでアーティストの方々が壁に描いたりとか平面をそのまま展示したりするようなものが沖縄は多いんですよ。だからすごく親近感を覚えてくれるところがあったんじゃないかと思いますがどうでしたか？

西川 沖縄の前に実験として京都と大阪で違う作品を持って、同じように観光地を巡るみたいなことをしていたんですけど、そこではほとんど声はかけられなくて、ちょっと会話することがあっても、外国の方がちょっと反応してくれたりとかそれくらいの出来事しかなかったのので、やっぱりこれは沖縄じゃなかったらできなかった作品だなんて思います。

おか 現在作品は元気にしているんですか？

山口 泊まったゲストハウスのオーナーさんに「今この彫刻の行方を自分たちで探しているんですよ。」って話をしていたら、欲しいって言ってくださる方がいらっしやあって、そのときにじゃあこのゲストハウスさんにあげますということで渡してしまったので、そのゲストハウスで門番みたいに立っているという状態ですね。

おか 地元ですごく話題になるかもしれませんね。楽しいお話でした、ありがとうございます。それでは玉木さんお願いいたします。

骨董市

玉木 ターニングポイントは「骨董市」です。

おか 骨董市？

玉木 私は古着とか古いものが好きで、3回生くらいのときに骨董市が近くで毎月やっていると聞いて、行ってみたらすごいハマってしまって毎月行っているんです。骨董市には古い写真とかもたくさん置いてあって、誰かの落としものだとか、持ち主不明のものもたくさんあって、古いものに惹かれるきっかけとか、確信を持ったのが骨董市でした。あとは骨董市に行くと古いものを見ていると、おばあちゃん家にもあるなって思い出して、おばあちゃん家に行ってもらってきたりして、その時についてい遺品を整理していたら写真も出てきて制作につながったということがあったので、骨董市がターニングポイントです。

おか 骨董市でそういうものをみて作品のコンセプトにつながっていくものとか、1つのものの中のストーリーとかね、何かそういうものが見えてきた感じなんですかね。ちなみに何か骨董は買ったんですか？

玉木 基本は食器とか服とかかわいいものを買ってます

けど、知らない人の写真とかもあったら気になって買ってしまいます。

おか 知らない人の写真は何かちょっとノスタルジックだなと思って買う感じですか？

玉木 持ち主はここにあることを知っているのか？とか考えますね。

おか これはまず出会いがあってこういった形になるのか、それともそういう骨董との出会いがあって何かがあって今みたいな形になったのかどっちなんですか？

玉木 骨董市に行くようになった時期に、現代美術にも興味を持ちだして、そこからなにか作りたいと思ったのがきっかけですね。

おか そうすると現代美術の影響と、骨董市で何か接点を見つけたときに1つのコンセプトにたどり着いたということですね。これは人物によって色々変わるものなんですか？今回は身近な方、身内といましようかそういった部分なんですかね。

玉木 他のバージョンも作ってみたら何か似てくるのかなとかは考えています。

おか そうですね。先ほどもおっしゃっていましたが、元の所有者がどのような方なのか想像したりとか骨董市で売られていることを知っているのだからかと考えるその発想が次の作品の展開になる可能性もありますよね。今回展示場所が倉庫という場所だったんですか？

玉木 個展をしたことがなかったので、ある意味1人の空間になったので集中して観てもらえる環境で良かったなと思いました。

おか 以前からA-Labの倉庫という場所には「蔵出し」、「蔵」というイメージがありました。なので「思い出の品物」というものがあの倉庫の中にあるというのがすごく作品のイメージ的にぴったりなのかなという気がしました。また倉庫の良いところは階段一段一段登って見える風景がどンドン広がってくるというのがいいですよ。最初は階段しか見えなくて、登って行ったときに作品が目の前に現れてくる楽しさがあって、僕は好きな場所ですね。ありがとうございます。続いて吉岡さんお願いいたします。ターニングポイントは「就活」、これ

はどういうことでしょうか？

就活

吉岡 自分はものづくりをしたくて、デザイナーを目指して就活をしていたんですけども、やっぱりプロに作品を見てもらうというのはものすごく良い経験で、厳しい言葉があったりお褒めの言葉があったり。自分の作品に向き合わざるを得ない時間というか。その時間がとても自分の作品にとってプラスになったんじゃないかなと思っています。

おか これまで制作することで精一杯だった部分が、今度は人に作品を観てもらって色々な感想を聞いたことによって、何か発見みたいなものがあったということですね。就活の時、どんなことを言われるんですか？

吉岡 厳しい言葉だと「これではやっていけないよ」と。

おか それは結構ショックですよ。

吉岡 なかなかショックですね。帰りの電車で落ち込んで帰るみたいなことがあったりしました。

おか 今現在就職はしている？

吉岡 はい。一応ものづくりをするところではあります。

おか その面接の時は良いお話をさせていただけたんですか？

吉岡 とても良い評価で。会社や見る人によって全然作品の評価って変わってくるんだなと感じました。

おか 大学で学んだことが現在の仕事に活かされている部分ってありますか？

吉岡 大学でもプレゼンテーションを行う機会がとて多くて、自分の作品の意図とか自分が思っていることを分かりやすく人に伝える工程というのは非常に学びになったかなと思います。会社の中でも自分が考えていることとか自分が作っているものを人に説明をするという機会が多いので、その経験はとても役立っています。

おか 吉岡さんの話し方と言葉がはっきりしているので、すごく言っていることが伝わります。だからプレゼンテーションをしてもみなさんによく聞いていただけだと思います。声ってすごく大事なんですよ。すごくハキハキしているし、物事をしっかりと捉えられているから。きっと今就職されてるところもそういったことも採

用された1つの要素にあると思います。それで今回やっている作業というのは半年かかったんですよ？あの作品は。地道にコツコツ、我慢我慢を重ねてたどり着いた1つの成果があの中に現れていると思うんですけど、吉岡さんは1人で制作するのと、チームでするのとではどちらがいいですか？

吉岡 楽という意味では1人がやはり楽だと思います。

おか 今回の作品は1人で作られたんですか？

吉岡 音楽の部分はお借りしているんですけども、それ以外の部分は全て自分1人です。

おか 仕事と作品制作という部分でいうと切り替えが大切になるのかなと思いますが、どういった形で切り替えていますか？全く違う形のチャンネルとして存在していますか？それとも延長線上にありますか？

吉岡 延長線上になりますね。

おか ということは、現在のお仕事をされていることによって作品というものが少しずつ成長していく可能性があるわけですね。

吉岡 そうですね。すでにひょっとしたらそうかもしれないです。

おか 現在、山梨に在住ですけど、東京や京都、大阪、兵庫など、どこかで展覧会もやってみたいですか？

吉岡 そうですね、多くの人に見てもらえる機会は作りたいなと思っています。

おか 今回、Artist Gateに出してみないかというお話しがあったときはどうでしたか？

吉岡 ありがたいなという気持ちですね。すごくいい場所で展示する機会をいただいたことは大変光栄なこと、これは自分にとっても成長となる一歩ではないかなと思いました。

おか さっき子供たちが展示を見に来ていて、吉岡さんの作品をじーっと見ていましたね。きゃっきや言うのかと思いきや、じーっと見ているのが印象的でした。今回の作品が2分半の作品ですが、今後はもっと長い尺の作品とかも考えておられますか？

吉岡 今後はもうちょっと大きい規模とかに挑戦できたらなと思っています。

おか 映像インスタレーションみたいな形の作品は僕も興味ありますので、今後楽しみにしたいなと思っております。ありがとうございました。お待たせいたしました、大東さん。ターニングポイントをお願いします。「停学」？ということですか？

停学

大東 大学に入学してから2年間はあまり作品を作っていない。課題は最低限出して授業もほどほどに出て、田舎でまちおこしを行うようなアートプロジェクトに参加したりしていたんですけど、いろんなところに遊びに行ったりしていました。精華大学は構内飲酒禁止なんです。ですが飲酒事件を起こしてしまい、停学となりました。停学が開けてから、学費もかかっている、ちゃんとしないとまずいと思い、そこから作品を作りだすようになって制作のことを考えるようになりました。そういった意味でもその停学が自分の中ではターニングポイントになっていると思います。

おか 作品に使っている瓶はお酒の空き瓶ですか？

大東 そうですね。酒の空き瓶もあります。そんなバックボーンもあるから酒瓶で何かできないかなと考えた時に遊び半分で電気釜に瓶を入れたんです。するとたまたまおもしろく瓶が変形したので、これでうまいことやったらいけるんちゃうかなーと思って、そこから今に至るという形です。

おか 本当に停学がターニングポイントですね。まさかそこから今の枯山水になるとは誰も思わないですよ。大東さんの作品は大学時代から拝見させていただいて、最初は個体というか1つの瓶に対する変化であると



か、そこから環境というものが変わっていったと思うんです。卒展の時の作品展示でもそうですが映像で表現したりと変わっていったというのは、さきほども話しに出ていましたが、「過程」というものを表現したいというところにたどり着いたんですか？

大東 自分の作品の場合は、もちろんできあがったものというのはすごい大事なんですけど、プロセスありきでコンセプトの部分に密に関わってくるなと自分では感じているので過程を表現するということは1つやっておいたほうがいいなと思って、卒展ではそういった表現を行いました。

おか 段階がはっきりしていて、最初に瓶のディテールというか形を見せるというのがあり、二つ目に過程的なものを見せる。そして今回一つの空間表現というものに展開されているというところが、ここ数年の間、すごいスピードで進んで行っているような気がするんですけどどうですか？

大東 自分でも感じている部分はあるんですけども、良い意味でそれは狙ってやっています。自分がこういう表現をしたいとか最終的にはこうなりたいという目標地点があるんですけど、それをするために最初の瓶単体で見せているときというのは作品のスケールが小さいなということがあります。サイズのなものもあるんですけど。作品のスケールをどんどん大きくしようという風に考えて最初はそういうプロセスを見せるであったりとか、空間にアプローチするというような形で大きくしていこうという狙いを持って取り組んでいたんで、それがたまたま卒展からすぐ展示の機会があったので、こうやって早い段階で出せたというのがあります。

おか 和室を活かした展示をされているものすごく興味深い展示になっています。大東さんありがとうございました。

アトリエにあるものを紹介

おか 最後に皆さんが制作をされている現場、いわゆるアトリエにあるものを持って来ていただいております。それでは土取さんアトリエにあるものを見せてください。



土取 先に写真をお見せいたします。馬とかレンズとか虹とか花とか、小物を集めて飾るのが好きで、アトリエの一角にそういうスペースを設けていて。

おか これは自分の趣味的な部分ですか？

土取 そうですね。これが転じてモチーフになって絵画にする時もあるんですけど、こういうものを作っていた時期があって。最近では作っていませんが、アトリエに絵と一緒に飾ったりしています。

おか 例えばアトリエにそういったものを置いた時に、ふと気づかされたりする部分というのがあったりするんですか？

土取 そうですね、そんな感じのことを望んで置いています。

おか なんか虹のやつとかいいですね、雨上がりに見るとすごく爽やかなイメージにもなりそうです。レンズみたいなものがありました。あれは何に使うものなんですか？

土取 あれは大学の前に骨董品の店があって、すごい安く1枚100円とか。ガラスとかを展示に利用できないかなというときに使って、そのときのものをそのまま飾ってますね。

おか 女性2人とも骨董品に興味があるというのはまた面白いですね。ありがとうございました。続いて坂本さんのアトリエにあるものを教えてください。

坂本 エプロンです。大学院に上がってからエプロンをするようになりました。学部の間は全身真っ黒の服で、染まっても大丈夫な服を着ていたんですけど、大学院に上がったので、エプロンを試みようかなと買いました。

おか エプロンって何か自分の中でイメージがあるんですか？エプロンを着けるとこういうイメージになるとい

うような。

坂本 大学の先生方がエプロンをされて染められていてかっこいいなと思ったのがあります。院に上がる時に自分でも買ってみたいと思って買ったんですけど、手についた色をエプロンで拭いたら癖がありまして、染料なので落ちなくなっていました。



おか 模様じゃないんですね。

坂本 そうなんです。染料とか薬品とか付いちゃってもう落ちないです。年に1回だけ洗うということは決めています。

おか 年に1回だけ？落ちるんですか？

坂本 落ちないんですけど、繊維の中に入っている染まりきっていない染料とか洗濯機の中にブアーと出てきて。水の中に入れた瞬間に茶色になったりします。

おか ありがとうございました。続いてお二人お願いいたします。

山口 私たちはあまり特定のアトリエを利用していないということもあって、制作道具とかもあまりしっかりこなしなと思っていたので、二人で制作する時によく重宝したなというものを持ってきました。これはご存知の通りコアラのマーチです。

西川 イラストがついているお菓子というところがポイントです。

おか これは、制作しながら食べるのか、休憩したときに食べるのか、どちらですか？

山口 休憩中です。行き詰まったりした時ですね。

西川 1日中作品のことを朝から晩まで考えているのでだんだん何か分からなくなってくるんです。

山口 顔色が悪くなったり。



西川 そういうときに時間がなくても1回休憩をはさんで、かわいいものに癒されて手を休めてからもう一回制作に入るという習慣を大事にしていた。

おか ちなみにこのお菓子とドリンクは何ですか？

山口 コーヒーとか紅茶とかと合わせてティーブレイクを楽しんだ後に気合を。

おか 1日でそのティーブレイク何回ありますか？

山口 1回とかなんですけど、ちょっと長く取ってしまっ、あ、やばい。みたいなことは多々ありました。

おか 1時間くらいとかですか？

西川 ありますね。

山口 軽くとるつもりだったのに、思ったより本格的なティーブレイクが始まってしまうみたいなことはありましたね。

おか だんだんお互いが何のお菓子を持って来てるのか楽しみになったりとか。

山口 ありますね。チョイスでちょっと揉めたりとか。

西川 しょっぱいものと甘いものが合わないみたいなの。

山口 私がしょっぱいもの担当だったら彼女が甘いものを担当するんですけど、その甘いものが私の気に合わないとか、逆に私が選んだしょっぱいものが嫌とか、そういう若干のおやつ小競り合いみたいなのが制作中に起こっています。

おか やっぱ休憩をすることによって制作をしようという気持ちになりますか？

山口 ずっと彫刻を見ていたりずっと粘土をやっていると、どんどんわけがわからなくなってきて。そこで1回コアラを入れるとほっこりするとか、目が冴えるとか。

西川 そういう気持ちはやっぱりあります。良い習慣だったなと。

山口 ちょっと使い方には気をつけないと、1日がティーブレイクで終わってしまうので。

おか きこの山とかだったらだめなんですか？

西川 そうですね、このイラストが大事です。

山口 レアな絵柄とかも結構良かったりするの。

おか なるほど。そういう遊び心もあるということですね。ありがとうございました。続きまして玉木さんお願いいたします。なんですかこれ？

玉木 「お香」です。アトリエはないので、基本的に自分の部屋で作業しています。

おか これはお香を焚いて自分でリラックスするということですか？

玉木 常に焚いていますね。

おか 常に！？

玉木 匂いものが好きで常に焚いています。

おか 香りはどんなものですか？

玉木 これが最近の一番のお気に入りのやつなんですけど、おばあちゃん家の匂いみたいな。お線香みたいな。

おか それは昔からお香を焚いていたのか、制作をすることがきっかけでお香を焚くようになったんですか？

玉木 昔から焚きまくってました。

おか ずっと焚いているんですか？

玉木 ずっと焚いていたいです。

おか 部屋に染み付くでしょ？匂いが。

玉木 染み付いていると思います。

おか その匂いがないと逆に制作が進まないぐらいのレベルに達している？

玉木 無臭だとさみしくなりますね。

おか 同じ香りばかりだとお香は飽きたということはないですか？

玉木 飽きました。なのでこれも前にハマっていたものとは違うお香ですね。

おか また違うものを買うわけですね。

玉木 気分で変えます。

おか 先ほどの骨董市の話と共通するのかなと思いますね。何か落ち着くとか。お香を焚いてその匂いに癒されてリラックスして集中力が増すんですか？

玉木 なんてしょう、落ち着くんですかね。



おか 何か1つの線で結ばれているのかなという気がします。ある意味ノスタルジックなイメージがずっとつながっているような。ありがとうございました。吉岡さんお願いします。

吉岡 「まちの文字図鑑 ヨキカナカタカナ」という本になります。

おか どういった本なんですか？

吉岡 看板の写真集なんです。割と古めの看板の写真をひたすら並べていて。あとは文字に焦点を当てたページがあったり。これが50音順に並んでいます。

おか これは今の仕事に繋がる部分ですか？

吉岡 そうですね、繋がるかなと。参考にはしていますね。

おか 今回の展示もそうですが、看板のものが多いのでそういったものが共通していると思うんですけどどうですか？

吉岡 まさにそうです。卒業制作のときもこの本を必ず机の上に置いて作業していました。

おか ネット帳のようなものですね。

吉岡 そうですね、でもそのまま写すのは良くないので、あくまで参考にしながらという感じですね。

おか 街の看板とか見かけたら気になりますか？

吉岡 すごく気になりますし、写真も撮っちゃいますね。

おか 昔のキンチョーの看板とか知ってますか？

吉岡 めちゃくちゃ大好きですね。

おか 今回の作品でもそうですが、きらびやかな看板のイメージというか昔の田園風景にキンチョーとかの看板がボンとあったりしましたが、そこから都会の看板までいろんな看板がありますからね。今度は逆に田園風景の看板も見たいなと思いました。ああいう都会的なものとまた違って。看板は僕も好きですね、ありがとうございました。最後になります、大東さんお願いします。

大東 ドンペリです。

おか 自分で買ったんですか？

大東 これはもらったものですね。アトリエから持ってこられるものがサイズ的に限られていたので、の中でこれが一番お気に入りかなというものです。

おか アトリエにあるものとしてこれは作品になっていくものですか？

大東 溶かしたいんですけどなかなか手に入らないものなので、なかなか溶かせずにいるという現状ですね。

おか さっきは看板の話が出たんですけど、瓶を見て「これ溶かしたいな」って思いますか？

大東 めちゃくちゃあります。この瓶が欲しいが故にそれを買うとか、街中でめちゃくちゃ大きな瓶を見かけることがあるんですけど、あれとか溶かしたいですね。

おか 日本中いろんな焼酎やウイスキーなんかのビンがたくさんありますからね。そういうものを見た時に飲みたいじゃなくて、溶かしたいと思うわけですか？

大東 そっちの方が先ですね。飲みたいよりもこれ溶かしたいなみたいな。

おか 瓶ってやっぱりそれぞれ違うわけですか？

大東 全然違いますね。お酒の似た種類でも、瓶の色とかサイズとか似てても厚みが違ったりするので。同じ温度帯で溶かしても全然違って変形したりするので瓶によって個体差はありますね。

おか 瓶の色とか太さや大きさとか厚みによってそれぞれの表情を見せるということですね。ありがとうございました。以上で『A-Lab Artist Gate 2020』全7名のアーティストの方々に作品に関して、ターニングポイント、アトリエにあるものというテーマで、様々なお話をしていただきました。ありがとうございました。



